

〈地域構想フォーラム〉

気仙地区開放講座とその地元紙連載で出会った「生きるかたち」

千葉修悦

東北学院同窓会気仙支部事務局長, 五葉山自然倶楽部事務局長

I. 地域のありようと「生き方」を示唆する
東北学院大学開放講座

1. 今を考える3つの問い

今3つのことを考えている。一つは、「豊かさとは何か」という問いである。学生時代、地方の人口減少と都市の肥大が顕著化し、過疎と過密が同時に進み大きな社会問題化していた。地方は、産業が衰退し、人口減少を招いて力を失っていった。地方の人びとが求めたのは、都会のような便利で快適な生活であった。豊かさの指標もここにあった。今、あらためてそうした価値を量るモノサシがはたして確かなのであろうかと思う。経済的な繁栄ばかりが優先され、その自己目的化が是認されてきた社会で、ひずみやきしみが生じている。

二つめは、「生きることの意味」についてである。健康で暮らしていける職業につき、社会的に認められて過ごす生き方に価値があると思われていた。しかし一方で、弱さやもろさ、苦しさや不安を抱き、前を見ることができず、自信を失い、自分を卑下し、自責の念にとらわれ、もがきながら生きる姿がある。そうした生き方にこそ「生きることの意味」が隠されているのでないか、と思うのである。

三つ目は、「人々の営為に学ぶことの尊さ」である。人それぞれに背負ってきた荷があり、通って過ぎってきた道がある。そうした人々と出会いや交わりの中から、生き方、考え方、行動様式を学び、教えられる。学生時代だけでなく、社会人になってさえも経験や知識が乏しく、自分のことで精いっぱい、気づかずにいた。

こうした「内なる声」を呼び覚ましてくれる大

きなきっかけとなったのは、母校、東北学院大学教養学部の佐々木俊三先生との出会いであり、「気仙地区開放講座」を通じた地域構想学科の先生方との交わりであった。私が出会ったのは単なる先生たちの「知」ではない。他者を思う深く広い「心」であり、誠実で真摯な「姿」である。

「気仙地区開放講座」から7年経つが、今なお「地域のありよう」と「生き方」を考えさせるのである。なぜであろうか。あの講座へ向かわせるのは、大学での講義や学会発表と異なり、地域社会に出向いて初めて会う人たちを前に失敗を許されない“一回勝負”にかけてきた先生方の誠実さ、真摯さを見るからだ。地域構想学科の創立理念が発揮されるべき絶好の機会に、その使命をも背負って講座に臨んだのである。いつの講座にも思索を深められ、たどり着いた「生きるかたち」を体現した言葉があった。

2. 地域構想学科が語りかける「より良き地域生活者」像

学生に向ける熱い眼差し、事象を捉えるまっすぐな視線。大学改革を静かな中にもゆるぎない信念をたぎらせて語る姿に引き込まれた。今から9年前、2004年11月27日、盛岡で開催された第2回東北学院大学文化講演会において、「東北学院大学教養学部の改革について」と題して話されたのは教養学部長の佐々木俊三先生であった。

佐々木学部長は言う。「教養学部は、大学の長い期間にわたる人材輩出の恩恵を武器にして、脆弱化した大学生に自己変革を促し、その学びの場として地域社会を選び、そこへ深く入り込むことで生きる意志を研ぎ直そうとする教育目標を新た

に立てた。平成17年度の学部改組の試みがそれであり、これによって『地域構想学科』という新しい学科を設立したのは、ある意味で必然の試みであったとすることができる。このように話す佐々木学部長の今日の価値基準への問い、時代の掴み方は新鮮で、鮮烈であった。

地域に生き、暮らすことの意味をあらためて認識させられたのは、同学科長・佐久間政広教授が「地域構想学研究教育報告」第1号（2011）に「地域構想学科のめざすもの」と題して、「地域構想学科の骨子およびカリキュラム」を次のように紹介された一文である。

「地域という『現場』において、グローバルな視野を持ちつつ当事者たちがみずからのよりよき生活を求めて営む種々の活動こそが注目されている。地方自治体職員として、地元企業の一員として、そして地域住民という生活者として、地域の『現場』にかかる様々な立場から、より良き地域生活者をめざす活動が重視されている。」

こうした認識に立って、「『知』の教授」を次の3点から捉えている。

「第一に、地域という『現場』を起点とした眼差しを有する『知』である。（中略）つまりは、地域における生活者の視点に立ち、その生活を維持・向上させるに必要な『知』という考え方である。

（中略）第二に、自然環境と社会環境の双方に配慮しうる『知』である。（中略）人文社会領域と自然科学領域の両方に目配りをおこなう『知』が必要である。（中略）第三に、総合的な『知』である。（中略）よりよき地域生活をめざし、生活課題の解決を図る者は、当該の課題に直接関係がないようにみえても種々の要因およびそれらの相互連関を考慮しなければ、その現実化はおぼつかないのである。」

「より良き地域生活者」とは、いったいどんな存在を指すのであろうか。地域はいつの時代も課題を背負い、困難に直面し、その解決の糸口を求め、懸命な努力を重ねている。私の住む岩手県の東南部、北上山系の南端にある住田町もそうであ

る。2012年11月末の人口6,251人の住田町は、「住田型農業」と「地域林業の総合的システム化」を打ち出し、独自の産業振興策を展開してきた。1955年頃、木炭から化石燃料に変わり、地域の産業を成していた木炭生産は衰退した。1962年に全国総合開発計画が施行され、隣接の大船渡市、陸前高田市、旧三陸町とともに地方都市建設を目指し、大船渡の後背地として町勢の挽回を図ることとなったが、地方都市建設は実現できず、本町は何ら得るものはなかった。住田町は1970年以降、農林業を柱とした町づくりを推し進めている。転機となったのは全国総合開発計画への期待と失望であった。

全国各地において、それぞれの地域資源に着目し、その活用によって就業機会を作り出し、雇用の場を確保しようとするが、思うようにいかない。試みては失敗し、失敗しては挑む。地理的・経済的ハンディを抱えながら、それに向き合い試行錯誤を重ねながらも、地域資源を生かし、地域固有の内発力を喚起し続けてきた。

しかし、経済効率を優先した経済政策は、地方の産業を衰退させ、活力を失わせてしまった。その影響は産業の領域にとどまらない。市町村合併、高校の統合・再編、病院の地域診療センター化・無床化など行政、教育、医療の現場にも及んでいる。

一時、「規制緩和」と「市場開放」とによって日本経済が活性化し、諸課題が解決できるとしたが、むしろ格差の拡大と固定化を生んだ。こうした背景にあって、気仙沼で初めて開催されたのが東北学院大学開放講座であった。

3. 気仙沼で開催された東北学院大学開放講座

この講座は、気仙沼と西隣りの旧室根村を含む地域の歴史的風土や自然環境をテーマに掲げ、県際にあるこの地方を振り返って見ながら、新しい時代の地域社会のあり方を考えてみようとして設定された。主題は、「海と里の結びつき“マツリバ”から」。地域構想学科の先生方を講師として2005年10月1日から10月29日まで5回の講座が、初めて

気仙沼で始まった。その演題と講師は以下の通りであった：

-
- ・第1回「気仙沼と室根を結ぶ点と線」～神と自然のかわり論からみる — 金菱 清
 - ・第2回「日本にとっての、あるいは東北の人々にとっての祭りとは？」 — 梅屋 潔
 - ・第3回「儀礼の『意味』をどうとらえるか」
— 津上 誠
 - ・第4回「室根神社祭典“マツリバ”（重要無形民俗文化財）視察」
 - ・第5回「室根の祭りと歴史の古層」 — 佐々木俊三
-

2006年には副題を「気仙沼市民大学」とし、参加者募集の広がりを持たせた同講座は、「海と里の結びつき — 唐桑～気仙沼～室根を結ぶもの」をテーマに、9月2日、9月9日、9月16日に気仙沼市で以下のように開催された。

-
- ・第1回「コモンズを支える仕掛け — 地域に埋め込まれた歴史文化の意義について」 — 金菱清
 - ・第2回（講義・見学）「熊野信仰と東北 — 名宝でたどる祈りの歴史」 — 政次浩（東北歴史博物館研究員）
 - ・第3回「東北地方の山岳信仰と日本の祭り — 災因論と福因論の立場から見た」 — 梅屋 潔
-

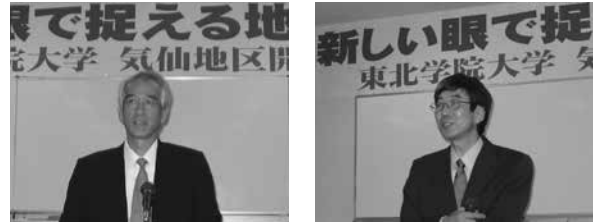
地域の優れた文化や伝統は日常にあり、その暮らしの足元にあることを気づかせ、気仙沼に暮らすことの幸せ、誇りを実感しようと開催したこの講座は、地域構想学科がその創設理念を発揮した歴史的な講座でもあった。

4. 気仙地区開放講座の開催

1) 開放講座2006

気仙沼での開放講座の開催から2週間後、その北隣りの気仙地区でも、東北学院大学の開放講座を開催した。「グローバルな視点で気仙地域の歴史的風土・自然環境・民俗芸能を捉え、新しい時代の地域のあり方や生き方を探る」ため「新しい

眼で捉える地域社会」をテーマに5つの講座を設定し、2006年9月30日から11月4日まで大船渡市で開催された。講座の盛況と受講者の強い希望もあって、翌年も開催することとなった。



9月30日の講座：佐々木先生(左)と佐久間先生(右)



講座参加者の様子（10月14日）

なおこの講座の実施については、東北学院庶務部校友課にお世話になった。特に小原武久氏には特段のご配慮をいただいた。

2) 開放講座2007

翌2007年、2回目となる開放講座は、学校や地域の先駆的・意欲的な実践事例を通して未来の地域社会を築く方向性を探求するため、「めざせ気仙（おらは）の人づくり」と題し、「地域社会と教育を考えるフォーラム」として、9月22日、29日、10月6日、大船渡市で開催された。

フォーラムの開催に先立って星宮望学長から「気仙地区開放講座07に寄せて」と題したメッセージを賜り、地元紙の「東海新報」に紹介させていただいた。「20世紀後半以降、とくに21世紀になってから地域社会の疲弊が指摘されています。本来の人間の営みとしての活動と、その成果を個々人の人生における幸福感に帰着させることが重要であり、それこそが国の重要課題であると

思います。(中略)東北学院大学のこれまでの学術的な蓄積と、御地における実践的な貴重な歩みの蓄積とが高度なコラボレーションを発揮して、今後への強力な歩みを記して頂きたいと念願しております」と、開放講座の開催意義とそれへの期待が述べられた。星宮学長には開講初日に参加を頂き、私たちを励まし、勇気づけてくれた。

3) 開放講座の特色

気仙地区開放講座の特色の第一は、物事の本質を見極める眼を養う動機を与えてくれたことだ。混沌とし不透明さを増す時代にあって「過去—現在—未来」の時間軸で事象を捉えることの大切さを気づかせ、表層にあるものに目を奪われがちになる私たちに内実をしっかりと見抜くことを示唆した。

第二は、真剣さ、まじめさが溢れていたことだ。「一回勝負」にかけた先生方のまじめさが、受講者の興味、関心を高め、受講者は講座の客体としてではなく、講座テーマを自分のこととして主体的、能動的に受講した。さらに言えば、この講座の企画・運営にあたった実行委員たちの熱意だ。会議を重ね同窓会員の理解を深めながら、組織としての合意形成を図り、開催に向けた準備、運営にあたった。

第三は、地域紙「東海新報」に一連の開放講座の内容を掲載し、地域の方々とともに紙面を通して「地域のありよう」と「生き方」を考える機会を提示できたことだ。この連載記事を主な内容に「講座の記録」を教養学部の協力を得て作ることができた。

Ⅱ. 地域新聞に紹介された開放講座のすがた

1. 地域紙「東海新報」への掲載

東海新報は、大船渡市、陸前高田市、住田町を取材エリアとする地域新聞である。発行部数は2007年2月には17,500部であったが、東日本大震災後は13,700部となっている。8面構成の日刊紙で、地域の出来事を知るうえでは欠かせない新聞

である。月曜日が休刊日である。

私たちは、「気仙地区開放講座2006」を同紙の「虹色広場」欄に「東北学院大学気仙地区開放講座」のタイトルで、2006年11月4日から2007年1月25日まで、「講義要旨」、「レスポンスカードの紹介」、「レスポンスカードへの回答」など23回掲載した。先生方には、受講者の年齢層や関心の程度が把握できない中での講座に加え、連載を始めるにあたって講座後2週間以内に「講座の要旨」、「レスポンスカードへの応答」の原稿を寄せていただいた。短期間の濃密な作業があつてこの連載が可能となった。私は、先生方の献身的な支援と協力に感謝した。

「気仙地区開放講座2007」の内容については、この講座掲載のために「とうかいかるちゃあ」欄を特別に設けてもらい、2007年10月16日から2008年5月27日まで、先生方による「提題」、学校や地域での取り組みの「実践報告」、参加者の「討論」など、44回にわたって連載した。

2ヶ年にわたる長期連載を後押ししたのは、誠実で一生懸命な先生方や実践発表者、コーディネーターであり、意欲的に討論に参加し、熱心に「レスポンスカード」を書いてくださった受講者たちである。また2007年の連載にあたっては、出稿期限が迫り立ち往生しそうな私を親切・丁寧に支えてくれたのが平吹喜彦教授であった。稚拙な連載原稿を根気よく直していただいた。東海新報への連載は、署名入りの覚悟と、連載し続ける使命を付与し、私自身を鍛えてくれた。

これらの掲載記事の中から、筆者が地域のありよう、つまりは「生きるかたち」について考えさせられた講師や受講者の言葉を紹介したい。以下、【 】は東海新報の連載番号、「 」はその引用、《 》は筆者の感想である。また講師は付記のない限り地域構想学科の先生方である。

2. 開放講座2006「新しい眼で捉える地域社会」から

1) 第1回「地域社会の助け合いを考える」

【1】「地域社会の助け合いを考える」佐久間政広

“地域社会の理屈”を考え、地域社会における助け合いへの期待を現実のものにしていく。「『助ける』『助け返す』という援助の交際は、自分と相手との間にどんな人間関係が築かれるのか、ということと密接に関係します。(中略) 地域社会の助け合いや共同活動にもちゃんと理屈があります。この理屈を踏まえて、地域の助け合いの活動を作りだすことが重要だと考えます。」

【2・3】「受講生の視点」(レスポンスカードより)

「やはり最後は無償の愛に行き着くのか」(40代女性), 「この講座で感じたことは地域のあり方の深さだ」(30代男性), 「介護等の個人的な事情にかかわることについては家族が中心になることを改めて認識した」(50代男性), 「『ただ人のために尽くす』, 『徳を積む』は地域の助け合いとは次元が違うのだろうか」(60代男性)

【4】「受講生の視点」への応答 佐久間政広

「そのときどきの状況と事柄の性質に応じて、公助・共助・自助を柔軟に組み合わせ、『あの手この手』を使って問題を解決していくことこそが重要なのではないのでしょうか。」

《急速に進展する高齢化が他人事でなく、身近なこととして「地域の助け合い」像を一人ひとりが模索している姿があった。》

2) 第2回「地域の『人』『宝』による活性化」

【5】「地域の『人』『宝』による活性化」柳井雅也

地域活性化に頑張っている地域に「学び」ながら、少子高齢化社会における「地域づくり」とは何かを議論。「それぞれの班で話し合った地図作業の結果を、他の班の結果と重ね合わせて検討を深め、やがては地域全体でこのような話し合いを繰り返しながら、地域住民のコンセンサスを形成して、地域振興策まで高めていくことが可能だ。」

【6】「受講生の視点」

「普段何気なくみていること、していることの中に『宝』となり得るものが案外隠されているということを改めて知らされた。視点を変えてみる、考えてみるのがいかに大切か。“気づき”の大切さを思わずにはいられない。」

【7】「受講生の視点」への応答 柳井雅也

「一つは『地域を見つめ直す大切さ』である。(中略)二つ目は『発想を変えてみること』である。(中略)三つ目は『地域住民が主人公である』ということ」

《知ることや発見することの喜びを『宝探しゲーム』で体现。気づかれない“宝”を見つけ、それを生かしていくことで地域に「夢」が持てることをも感じさせた。》

3) 第3回「三陸海岸の自然景観とその地史的背景」

【8】「三陸海岸の自然と地史的背景」松本秀明

氷河時代から現代にいたる約2万年間の地球規模での環境変動に対し、気仙地区での地形はどのように反応したかに焦点をあてる。

「海岸線が複雑に入り組むリアス式海岸は『沈水海岸』と呼ばれています。沈水海岸は、一般には海面に対して陸地が沈んだと理解される場合が多いようですが、三陸地域の三陸地域のリアス式海岸などは前に示した氷河期から縄文時代前期にかけての急速な海水準上昇により沈水してできた地形なのです。」

【9】「受講生の視点」

・「気仙地区のリアス式海岸が詳しく説明され、『三陸海岸』をより身近に感じる事ができた。」
「災害対策は過去のことを調査検証して、考えなければならぬことがわかった。」

【10】「受講生の視点」への応答 松本秀明

「人間社会を考えると、あるいは自然のメカニズムを理解しようとするとき、日常のそれではなく、対象とする事象や現象と同じタイムスケールの中に自分の身を置くことが重要なのだと思い

ます。それにより、日常生活や社会のしがらみから解放され、客観的なものの見方が可能になるでしょう。」

《私たちにとってなじみの薄い「地形学」。それだけに多様な感想が寄せられた。自然への畏敬の念をも呼び起こさせた。》

4) 第4回「少子高齢化を支える社会システムを考える」

【11】「少子高齢化を支える社会システムを考える」増子 正

住民互助のネットワークと、地域通貨による支え合い事例から学び、少子高齢社会を支える福祉コミュニティの構築について考える。

「こうした時代だからこそ『温故知新』— ふるきをたずねて新しきを再認識するような、忘れてきている『たすけあい』『古きよきもの』の価値をもう一度見直す地域福祉の展開が求められているのではないのでしょうか。」

【12・13】「受講生の視点」

「少子高齢化問題がいま一番心配である。高齢者の二人暮らしが非常に増えているとのこと。増子先生の話した『コンパクトシティ』には、『自分としては両親をまだまだやりたくないなあ』と話されたひと言に、私は心打たれ涙ぐんでしまった」(60代女性)、「コンパクトシティの発想、具現化はこの地方にはなじまないと思う。便利さだけでは決して豊かさは得られない。“住み慣れた地域”には、これまでの人々の結びつきや生活の空間があるからだ。増子先生が『父や母をコンパクトシティにやりたくない』との思いがわかる。同感である。」(50代男性)

【14】「受講生の視点」への応答 増子 正

「何より重要なことは、その地域に暮らす住民が地域の課題を認識して『少子高齢社会を支え合うシステム』の必要性に声を上げることが大切です。身近なところで井戸端会議を開いて、手段としての地域通貨や利用券の支え合いのシステムを話題の中に取り入れて、共感者を増やすことから

始めてみてはいかがでしょうか。」

《それぞれが自分自身を見つめ、地域社会のありようを直視する中で、新しい助け合いのシステムづくりへの関心、期待感が高まっていることがうかがえた。》

5) 第5回「祓えと神楽」

【15】「祓えと神楽」 佐々木俊三

歴史文化の継承と更新に寄与してきた神楽をとおして、古代芸能の発生と意味に注目する。

「鎮魂とは、離れていく魂を奮い起こし、魂を身体の中におさめて沈めることを意味します。人が死ぬと喪の期間があります。その間に歌舞飲食を行い魂を振り起こそうとしたのです。その歌舞が神楽でした。このように、神楽の起源を尋ねると、神楽とはこの世に光をもたらし、死の災いを振り払い、魂をもう一度やり起こそうとする時間の新鮮化という機能のあったことが理解されます。」

【16】「受講生の視点」

「この講義で神楽の目的、歴史など民にとって神楽が何なのかを勉強でき、少し神楽の見方が変わったような気がする。神社のことなど神と人との係わり、歴史をこれからも大事にしていきたいと思う」(30代男性)、「これまでは伝統を受け継ぐだけで、いままでこれほどの内容がわからずに過ごしてきたので、大変参考になった」(70代男性)、「地名と神楽の起源を語られたことで、昔の人の生活の一部が分かった」(70代男性)

【17】「受講生の視点」への応答 佐々木俊三

「気仙や氷上の地名についてお話をしました。それは、地名が遺跡と同じ意味を持つものだからです。遺跡を発掘するように、地名を発掘すれば、古来、人がなぜここに住んで生活しようとしたかが理解されます。(中略)地名を掘り下げること、そうした古人の心に届くことが可能なのです。それは、現在の生活を新しい目で見直すことにつながるでしょう。(中略)私たちは、古人が伝えようとした意味をしっかりと把握しそれを私なりに未来の人々に伝えていかななくてはなりません。

何よりも神事とは人事なのです。すなわち、人間が造り出し築きあげてきた伝統なのです。」

《伝統や文化は、人びとの創意や工夫、日々の営みの集積のうえに築かれている。一方で、日常の足元に埋もれていることに気づかずにいる。積み重ねられてきた時間と人びとのかかわりによって今日に引き継がれている種々の営み、その意味を知る契機となった。》

6) 「受講生は語る」

【18～20】「みんなで語ろう『企画・運営・今後のあり様』」から

受講生Mさん（50代男性）「第1回講座の佐久間先生や第4回講座の増子先生の話聞いて『なるほどそうなのかな』と思うことが多々あった。『レスポンドカード』を受講生の皆さんは良く書いている。今あらためてこの『レスポンスカード』を見せていただき感じるところがいっぱいあった。」
受講生Cさん（60代男性）「この講座をぜひ続けてほしい。もっともっと多くの人に受講してほしいと思う。」

受講生Mさん（30代男性）「アンケートの中に開放講座を今後も開催する場合、『あなたは、受講を呼び掛けることができますか。』という問いに『できる』と答えた人が15人もいる。この人たちの気持ちを大切にしながら、呼びかけのネットワークを広げていけるのではないかな。受講者に30代や40代の人たちを誘うことも必要だ。」

《開放講座の継続的な開催に向け、大学、受講者、実行委員が相互に理解を深めあうことができた『語る会』となった。》

【21】投稿「知への憧れ」大船渡市・田村長平

「5回の講座それぞれで、物事を新たな視点で見たり、考えたりすることを指摘して下さったこと、すなわちこの講座の一貫したテーマ『新しい視点で捉える』そのものだったことに、学ぶところが大いにありました。」

【22】「開放講座を顧みて」佐々木俊三

「高齢化する地域社会から見れば、伝統と風土

に根差しながら新しい『生きる形』を作り出す若い人材こそ求められるものでしょう。大学と地域社会とがこうした形で互いに恵みあい、相互的な経験を蓄積していくことこそ、開放講座が求める目標なのです。今回の講座はまさにその糸口でした。今後、この糸口が編み込まれ、見事な織物にまで仕上がっていくことを祈ってやみません。」

【23】「継続したい開放講座」東北学院同窓会気仙支部長・及川 純

「東海新報社のご高配により、『虹色広場』欄で『東北学院大学開放講座』を取り上げて頂き、住民とともに新しい時代の地域のあり方や一人ひとりの生き方を一緒に考えていく契機とすることができた。このことは、地域に開かれた開放講座の意義を深めさせてくれたものと思われます。」

《初めてのことだけに戸惑いながらの開放講座ではあったが、「地域のあり方」やそこでの「生き方」を掘り下げて考える契機となり、翌年への開催を促してくれた。》

3. 開放講座2007「めざせ気仙（おらほ）の人づくり」から

1) 第1回「地域社会と環境教育」

【1】「地域を涵養する力」佐々木俊三

「地域を涵養するとは、そうした風土とそこに生きた人々の姿に学ぶことです。地域において生きられてきた真実、それを発掘し、地域を生きた人々の工夫から、もう一步踏み出す「よりよい生」を目指すこと、それ以外に地域を涵養できる力はありません。今回は開放講座で地域社会における教育の意義を考えます。教育は地域の未来です。地域の未来に向けてどのような教育のプログラムを作るのか、それを皆様とともに議論し、地域が長年にわたって風土や人事や歴史において耕してきた力に目覚め、それを共に育んでいきたい、そう願っております。」

【2】「環境教育がはぐくむ“持続可能な地域”」平吹喜彦

「気仙地域には里地、里山、里海に象徴される

麗しい自然環境、自然環境と調和した暮らしの知恵や技法、心の豊かさを物語る文化遺産がたくさんあります。昔ながらの暮らしには戻れないにしろ、身近な事象を見つめ直し、『ヒトと自然のよりよいかかわり』が育まれてゆくように思います。」

【3】実践報告「いのちの循環 ～ぼくたちの里山、里川、里海～」 朝日田卓（北里大学水産学部水圏生態学研究室・准教授）

「おらはの川や海を守り子孫に伝えていく最も確実な方法、それは子どもたちに川や海で思いっきり遊んでもらうことではないだろうか。」

【4】実践報告「感性を磨く－五葉山麓自然観察会」 皆川繁雄（住田町立上有住小学校PTA会長）

「この五葉山麓自然観察会に参加した皆さんが、地域にある豊かな自然を改めて確認したのではと思います。また、この活動を通して、身近な自然の変化にも関心を持つ意識も高まってきていると思います。」

【5】討論「地域社会と環境教育」 コーディネーター・村上有朗（大船渡高校進路指導主事）

「『環境づくり』は『人づくり』であり、『環境にやさしく』というのはつまるところ『人にやさしく』するということにつながるのではないだろうか。」

【6～12】受講生の視点－「地域社会と環境教育」

「北里大学の皆さんの取り組みを、越喜来小学校だけでなく大船渡市内の全学校に広めてほしい。北里大学の活動に感心する。地域に貢献することが大切なことである。」（50代男性）

「北里大学の朝日田先生、上有住小学校の皆川繁雄PTA会長さんの体験報告は、子どもたちと環境を考えながらの学習で、これから子どもたちとともに学ぶ姿勢がものすごく良かった。」（60代男性）

「このフォーラムに参加し、生態学の話などを聞いて、『私たちは生かされている』ということに気づいた。私も含め、現代人は多くの犠牲や支えの中に成り立っていることを忘れ、自身が主

人公のように生きているように思う。」（大船渡高校 女生徒）

【13】フォーラムにみる「環境教育」 平吹喜彦

「参加者一人ひとりが、日常の行動や居住地の実情にまで踏み込んで模索したことに、大きな意義を感じます。（中略）今回のフォーラムに参加して、気仙地域には山一里一街一海が連なる麗しい自然、共生を可能にする知恵や技法を埋蔵した伝統的な暮らし、地域奉仕をめざす心意気に溢れた人々の存在を実感しました。世代や組織を越えたネットワークがさらに拡大し、新たな挑戦が大きく飛躍することを予感しているところです。」
《真正面から自分自身と向き合い、しっかり考え、果敢に行動する意志を感じさせた。また、当たり前と思われることを意識して捉えること、自然に触れ合うこと、そして子どものときの新鮮な驚きを大切にしていくことを認識しあえた。》

2）第2回「地域資源の活用と学校教育」

【14】「地域と学校の連携による開かれた教育実践」 吉村功太郎（東北学院大学教養学部）

「子どもの社会的体験活動が地域を基盤として行われることが、地域の担い手としての資質（地域に根ざした社会人）を育てていくことにつながっていくのだと思います。（中略）家庭や地域社会と学校の連携は、子どもを教え育てるということにとどまらず、地域社会そのものを育てることにともつながるのだと考えています。」

【15】実践報告「わかめ～養殖から販売まで生徒たちで」 平山豊（大船渡市立末崎中学校教諭）

「わかめ生産にとどまらず、人と人とのコミュニケーションの仕方をこの体験を通して学ぶ。『わかめ』という末崎の地場の商品を理解してもらうための説明、アピール、購買意欲をそそる呼び込みなどが生徒自身を鍛えている。」

【16】実践報告「“現場”の誇り－生出からの発信」 菅野征一郎（陸前高田市矢作町・生出地区コミュニティ推進協議会事務局長）

「ふるさとの風景は、そこに暮らす人々の日々

の営みや風土それ自身の持つ情感をも想起させてくれます。積み上げられてきた時間と人々の繋がりが織りなす唯一無二の空間、それがふるさとです。(中略) 清流・生出川も『清水(しず)の湧口(わくつ)』も、そして自然豊かな周囲の山々も私たちの大事な宝です。」

【17】討論「地域資源の活用と学校教育」コーディネーター・村上育朗

「活動を盛んにすることによって地域社会と学校の連携がうまくいくに違いないと、今回の討論会での高校生の発言を聞いた出席者はみな確信したのではないだろうか。真の地域資源とはまさに地域に住んでいる人間そのものだからである。」

【18～22】受講生の視点—「地域資源の活用と学校教育」

- ・「学問においても地域社会においても、個々人のもつ学ぶ力、理解する力、感じる力が大切なことを教えられた。」(30代男性)
- ・「『地域力の向上』に関心を持った。地域の担い手を育てることを通して地域の人材が育てられるという。私は自分の地域の現状を見直していくことの大切さを学んだ。どうやって現状を把握していこうか、考えることから始めたい。何かをやりたいと思っているが、その糸口が見つからない。」(60代女性)
- ・「生出にまだ行ったことはないが、木炭まつりには是非行ってみたい。」(60代女性)
- ・「このフォーラムに参加して、教育は学校だけでなく地域社会を組み入れて行われるべきだと思った。地域から学ぶことはたくさんあるし、貴重な経験もできる。」(大船渡高校 男子生徒)

【23】フォーラムにみる「地域とのつながり」吉村功太郎(東北学院大学教養学部)

「異質な人やものと出会うことを通じてさまざまな経験を積むことが、いろいろな学びの基盤となっていくのです。地域社会は、まさにそのような経験の場なのです。そしてこのことは、子どもだけでなく大人にとっても同じことが言えるのだ

と思います。」

《地域における生産現場体験が、生徒たちをたくましく育てている。地域を知り、地域に学ぶことで、郷土愛が育まれ、地域への誇りが生まれている。》

《人や物、そして経験や知恵について学び直すことで、地域の魅力が発見でき、埋もれていた資源を生かす契機をもたらす。生出は、そうした内発力を高めることで、自らの魅力を発揮し続けている。》

《「伝えること」「共に学ぶこと」「感動を共有していくこと」が重要であり、一人ひとりの営みが明日を築く源であることを再認識させてくれた。》

3) 第3回「地域の教育力」

【24】実践報告「文化・産業・伝統技術を学ぶ—地域文化選択講座」関亜砂子(岩手県立住田高等学校教諭)

「地域文化選択講座は、地域の教育力を学校の教育活動に生かすことにより、地域の財産である豊かな自然や文化等を見直し、地域への誇りを持つこと、自然を守り地域を大切にするなどの、地域への愛着を育成することに寄与しているのではないか。」

【25】「現代社会におけるコミュニケーションの変容」佐々木俊三

「経験とは、人とともに生きて学ばねばならない喜怒哀楽、誕生と喪失と死を経験することを意味しています。愛していた近親との別れ、好きだった友人との別離、孤独や脱落の不安まで、経験に含まれます。これらはすべて、具体的な他者との接触なしに、そして心の喜怒哀楽の鍛錬なしに生きられることはありません。それらをはぐくむものは、生活の場所である地域であり、地域での具体的なコミュニケーションでした。経験をはぐくむと言う点で、地域の価値がどれほど重要なのか、そのことを私はいま考えています。」

【26】討論「地域の教育力」コーディネーター・

村上育朗

「豊かな自然の中で、地域の一員として人々の生も死も自分のこととして見事に捉えている。これこそがまさに『共感の想像力』ではないだろうか。このようなところ豊かな若者を、組織の取り組みと相まって、個人として日常の生活のさまざまな場面を通して育てていくことが、『地域の教育力』を高め、『持続可能な地域』を創造していくことにつながるのだと、3回にわたる討論で確信した。」

【27～32】受講生の視点―「地域の教育力」

- ・「自然や人材を含めた地域の教育力なくして、この講座は成り立たない。地域にある貴重な人材、経験、自然、知恵を学校現場に生かしていくことが、『地域の宝』を受け継ぐことにつながっていく。『生徒に何を学ばせ、どのような人になってほしいか』、目的や目標を明確にしながら、13の講座を少しずつ改善し、継続していったほしい。」(50代女性)
- ・「生活する中で、他者とかかわらずにはいられないが、最近は自分を偽って他者と接することが多いように思う。コミュニケーションはあいさつが基本であり、地域内のあいさつを大事にしていきたい。」(大船渡高校 女子生徒)
- ・「人には誰でも『自分をよく見せたい』『傷つきたくない』という本能的な思いがあるが、現代人はこの傾向が特に強いように思える。それは失敗経験が極めて少なく、一度傷ついてしまうと立ち直るだけの力を持ち合わせていないためではないか。それだけに、自己防衛本能がより強くなっているのではないのか。そうしたことがコミュニケーションに対する恐れを高め、『無関心』を冗長させているように思われる。」(50代女性)
- ・「『経験』という言葉の根源が分かって本当に良かった。この場(講座)に来なければ、きっとその真意を知る機会がなかったと思う。持病のある私にとって『死』は身近な言葉でしたが、そのことを深く考えていくことで、『生きる力』『よりよく生き続けようとする力』が湧いてく

る言葉に変わった。」(60代女性)

- ・「佐々木先生の話は個と個の断絶をいかに回復させのかという提言であったように思う。『死の教育』は、仏教では『悲』の立場から述べられる。私は『慈』を所作、行動の基礎に据え、『ボランティア』を前面に出していけたらと考えている。そのことによって、思いやりの心が育ち、『断絶』が解消されるのではないかと考えた。私はユネスコ活動を通じて、その実現に向け進もうと思う。」(70代男性)

【33】フォーラムにみる「コミュニケーション観」

佐々木俊三

「私たちが歴史的な自然と出会うとき、私たちはその歴史的な自然を仲立ちとして、それらとすでに出会っていた昔の人々とのコミュニケーションに至るのだということです。そうです。コミュニケーションには、横断的な『相』と交錯する縦断的な『相』、すなわち縦のコミュニケーションがあるのです。」

《多様で奥行きのある講座は、自然や伝統を大切に作る風土と、多彩な講師陣に支えられている。》

《他者の痛み、悲しみ、苦しみを感ずる力、察知する力を養っていくことが、しなやかで弾みのある、温もりのある地域をつくる。「共感の想像力」がひとり一人に問われている、そう実感させられる。》

《「私たちは経験の重要性をどこかに忘却し、生きてきたために、誰もが潜り抜けなければならない試練や訓育としての、『子どもたちに遠回りをさせる教育』を怠ったように思える。」同感》

【34】～【40】受講生からの投稿

- ・知的欲求に応える開放講座～地域で生きる論理を学ぶ。田村長平(大船渡市)
- ・フォーラムで感じたこと。大船渡高校1年・熊谷理沙
- ・自然体験が育む感性と身の回りの自然。中嶋敬治(大船渡市)
- ・人生を楽しむために学ぶ。平勝太郎(住田町)
- ・学ぶこと・生きること。村上敏弘(住田町)

- ・講座で知る風景の力、皆川マツ（住田町）
- ・賛歌―気仙地区開放講座の先行的試みをたたえて、佐熊位（住田町）

【41】「小さきものの美しさ」―連載を終えるにあたって、千葉修悦

【42・43】「今こそ地域の教育力の発揮を」～フォーラムを終えて、コーディネーター・村上育朗（大船渡高校教頭）

「私は若木である青少年が変化したとは思ってはいない。変化したのは土壌部分に当たる家庭や地域社会ではなかろうかと考えている。だから、今こそ『地域ぐるみの子育て』が重要なのだ。今の子どもたちは情報や知識は豊富にあるけれども、本当に必要な情報や身体で経験する機会が少なくなってきた。」

【44】「地域社会と教育を考えるフォーラム」を顧みて 佐々木俊三

「フォーラムとは、交流のための広場です。広場に集まった特性ある取り組みが、相互に異質の取り組みと出会い、それを介して新しい認識を獲得したり、別の視点で提供したりして、交流の輪を広げる『互市』のような機能を発揮する場所なのです。私は、その互市に高齢者と子どもとが互いに贈与し合う取り組みを提案したいと思います。高齢者には経験の知恵があり、この知恵は伝承されることを求めます。」

《3回の講座において、「実践報告」から地域の特色ある取り組みをみてきた。郷土の身近な自然に親しませ郷土を愛する心を育む、地域の主産業を実体験させる、地域資源を生かし高い内発力で復興を実現する、そうした地域の姿である。そこには、人々の弛まぬ営為の集積によって、固有の特色ある地域が形成され創造されていく地域の姿と、「より良き地域生活者」の姿が体现されていた。便利さや成果だけを求めるがゆえに喪失した人間の精神発達にかかわる「経験の価値」。地域においては日々の生活のなかから個別具体的に「経験の訓育」がされることを求められている。そのことの重要性、大切さを気づかせてくれた。》

Ⅲ. 開放講座が導いたリレーエッセイ

1. 106人の「生きるかたち」

2ヶ年にわたる開放講座の企画運営、東海新報への67回に及ぶ開放講座の紹介記事掲載を通じ、足元の地域をじっくりと考える機会を得ることができた。そのことは、東海新報での新たな連載「五葉山の魅力」リレーエッセイを企画し、実践する土壌となった。また開放講座でのレスポンスカードが、改めて一人ひとりの歩みの尊さを教えてくれた。

三陸沿岸の最高峰である五葉山（^{こようざん}1,351m）の自然の豊かさを後世へ残そうと1998年2月22日に結成したのが「五葉山自然倶楽部」である。創立10周年記念事業として、五葉山の存在意義、恩恵、魅力を語り継ごうと、五葉山の魅力についてのエッセイを広く募集し、東海新報への掲載を企画した。目に見える自然の美しさや眺望の良さだけでなく、自らの歩みと重ね合わせ、内面世界をも書き綴ることで、五葉山が無限の広がりを持って存在することを予感したからである。

執筆者に期待したのは次の3点である。第一は、自分自身の感覚で捉えた五葉山の魅力を伝えてもらうこと。第二は、自らの人生、生き方と重ね合わせ、人生観や価値観を育んだ五葉山を述べていただくこと。第三は、五葉山を再発見し、再認識した経験を語っていただくこと。

2008年9月から2010年11月まで109編を掲載。執筆者は13都道府県の学生、主婦、会社員、大学教授、女優など106人。教養学部の先生方にも書いていただいた。その中には、佐々木俊三先生、平吹喜彦先生、松本秀明先生、下館和己先生、非常勤講師の木村知義さん、そして住田に調査に来られた大学院生の古河亮介君が含まれる。

これらは『それぞれの生きるかたち』として、イー・ピックス出版から2011年12月に出版された。その内容は、本誌の「文献解題」で紹介する予定である。

2. 新たな連載—『五葉山』からの贈り物

2011年1月から始めた新たな連載「『五葉山』からの贈り物」は、エッセイが問い、語りかけてきた意味を深め、今日私たちが忘れかけ、失いかけている人間としての、社会としてのありようを呼び戻そうと、読者からの投稿を交え考えていこうとする試みである。

連載開始から2ヶ月後、あの東日本大震災が起き、連載は中断した。ある時、「今こそあの震災をどう感じ、どのように思っているのか、そのことを書いてはくれないか」と大船渡湾のすぐそばに住んでいた弟夫婦を津波で亡くした地域の尊敬する長老から言われた。

一度は連載を再開したのだったが、2011年12月に18回を数え、連載は止まってしまった。「まだまだ掘り起こすべき言葉が残っているが、このままエッセイにみる言葉の中から『生き方』を捉え、考えていっていいのだろうか」と自問していた。長老から投げかけられた言葉がいつも気になっていたが、「それぞれが心に大きな傷を負っているのに、そのことに触れ、あの時の思いを、あの場所で感じたことを書いていただけるだろうか」と迷っていたのである。

しかし、「一人ひとりが『いま』と向き合うことで、それぞれの『生きる』存在をあらためて知ることにつながるのではないか」と連載を心した。そして「『五葉山』からの贈り物」の中見出しを『それぞれの生きるかたち』とした。あの震災をともに感じ、ともに考え、ともに歩んでいこうという思いからだ。

東海新報にほぼ毎週1回掲載しているこの連載は、2012年12月21日で連載51回を数えた。自宅をなくし仮設住宅で過ごす人、家族を亡くし月命日にお参りする人、遠くから被災地、仮設住宅に通い続ける人—そうした人たちの内面世界が綴られている。

この連載が些細で微力ではあっても、「今、何を好ましいと考えるか」という生き方の問いが、きっと一人ひとりの胸に伝わらと思う。陸前高田

や大船渡、釜石、気仙沼など被災地、被災者がいつも胸のうちにある。係わりの薄い人たちにも「あの日」、「あの時」のことに思いをいたしてほしい。連載し続ける大きな理由である。

この新連載「『五葉山』からの贈り物」についても、機会をみつけて報告したいと考えている。

<講座記録>

気仙地区開放講座2006「新しい眼で捉える地域社会—地域社会と教育を考えるフォーラム 講座の記録」、東北学院同窓会気仙支部、東北学院大学教養学部

気仙地区開放講座2007「めざせ気仙（おらほ）の人づくり—地域社会と教育を考えるフォーラム 講座の記録」、東北学院同窓会気仙支部、東北学院大学教養学部

<文献>

五葉山自然倶楽部編（2011）「それぞれの生きるかたち—『五葉山の魅力』リレーエッセイ」、イー・ピックス出版（大船渡市）、2011年12月25日発行

<寄稿者の紹介>



ちば しゅうえつ

1954年 岩手県住田町生まれ

1977年 東北学院大学経済学部経済学科卒業

1979年 住田町役場勤務（～2010年）

1984年 林野庁地域林業対策室勤務（～1985年）

1998年～五葉山自然倶楽部事務局長

2002年 岩手大学農学部非常勤講師（～2008年）

2007年～東北学院同窓会気仙支部事務局長